

REBECCA



レベッカ

デュ・モーリア
大久保康雄 譯

新版世界文學全集

28

新潮社 版

新版世界文学全集 28

レベッカ

Title : REBECCA

Author : Daphne du Maurier

Originally Copyrighted by Curtis Brown Ltd.

Copyrighted in Japan by SHINCHOSHA Co.

昭和三十三年二月二十四日 印刷
昭和三十三年二月二十八日 発行

定価 参百五拾円

地方
売価 参百六拾円

訳者 大久保康雄

東京都新宿区矢来町七一

発行者 佐藤義夫

東京都新宿区矢来町七一

発行者 株式会社新潮社

電話東京 四七一 一一一 九番
振替東京 八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷 扶桑印刷株式会社
製本 新宿 加藤製本所

解 説

ダフネ・デュ・モオリア (Daphne Du Maurier) 女史は、一九〇七年五月十三日、ロンドンで生まれた。祖父のジョージ・デュ・モオリアは、画家で小説家で詩人という多彩な才能の持主で、イギリス上流社会を諷刺した戯画をパンチ誌に発表して好評を博し、また小説のほうでは、いずれも自伝的な要素の濃い、「Tribby」(1884)、「Peter Ibbetson」(1891)の二作と「The Martian」(1896)の作者として知られている。また父のジュラルド・デュ・モオリアは、イギリス演劇界で活躍した高名な舞台俳優であった。だから女史は、いわばロンドンの芸術的名門の出であり、その芸術的素質は父祖伝来のものということができる。

女史は正規の学校教育をうけるかわりに、家庭教師によって家庭で教育をうけて育った。十八歳のとき、半年ほどパリですごしたが、これも留学というよりは、単に見聞をひろめるための滞在であつたらしい。しかし、その期間にフランス語を習い、熱心にフランスの小説を読んだということである。小さいころから小説が好きで、祖父や父の書棚から各国の文学作品を手あたりしだいに抜き出してきては耽読し、十五歳ごろからは自分でも詩をつくったり小説めいたものを書いたりするようになった。

文学生活にはいつた初期のころは、カザリン・マンスフィールド、メアリ・ウェップ、モオパッサン等に傾倒し、「かなりつよくその影響をうけた」と女史みずから言っている。しかし、その後は、現代作家のものとはあまり読まず、もっぱらオーステイン、トロロープ、ステイヴンソンなどを愛読したということである。(女史の作品から感じられるのは、マンスフィールドやモオパッサンよりも、むしろオーステインやステイヴンソンの影響である。とくに「ジャマイカ・イン」「レベッカ」に、この傾向がいちじるしいように思う。)

「わたしが好きなのは、田園の生活、散歩、庭づくり、小鳥の世話、舟遊びなどであり、きらいなのは、都会の生活、宴会、パーティ、大きな公式の集まりなどである。わたしは、いかなる政治団体にも関心をもっていないが、すべて世界の紛争は、人間の利己主義に根ざすものであり、すべての人間個々が個人的な平和と利益のみを

考えて行動することをやめなにかぎり、世界の平和は招来されぬであらうと信じている。わたしは道德再武装運動 (Moral Re-Armament) の主張には賛成であるが、しかし絶対にオックスフォード・グループのメンバーではない。」(モリア「自己を語る」より)。(オックスフォード・グループ運動というのは、アメリカのフランク・ブッチマンの主張によつてはじめられた一種の宗教運動で、少数のグループによる家庭的会合で各自の宗教的体験を語りあうのがその特色である。イギリスでも最近なかなか盛んなようである。)

一九三二年に女史はフレデリック・A・M・ブラウニング (Frederic Arthur Montague Browning) 氏と結婚した。当時ブラウニング氏は英国近衛歩兵連隊所屬の中佐であつたが、その後昇進して、一九四一年に将官となつた。英三軍を通じての最年少の将官として評判になつた。第二次大戦中にはシンガポール英派遣軍の参謀長をしていたと何かの記事で見た記憶があるが、現在は陸軍中将で、王室つきの高官として宮廷勤めをしているといふことである。

この夫君との家庭生活は、かならずしも、しっくりとはいっていないようである。ほとんど宴会や公式の集まりに明け暮れている宮廷勤めの高官の夫人が、パーティや社交が何よりもきらいとあつては、どうにもこれは処置なしであらう。それからあらぬか、女史も、結婚の当初はロンドンの官邸とハンブシャのコーンウォールの別邸とに生活を二分して、始終行ったりきたりしていたようであるが、最近、めつたにロンドンへ出ることもなく、もっぱらコーンウォールの海岸に引きこもつて執筆生活をつづけているといふことである。一時は離婚説まで出たようであるが、事実は別居生活といふところらしい。

デュ・モリア女史は、ほぼ五十篇に近い短篇と一篇の戯曲 "The Years Between" (1945) とを別にして、十四篇の長篇を書いているが、それらの作品は、いわゆる本格小説と娯楽的要素の濃いものと伝記的作品といふふに、だいたい三つに分類できるようである。「愛する心」(The Loving Spirit, 1931)「青春はふたたび来らず」(I'll Never Be Young Again, 1932)「シリアスの発展」(The Progress of Julius, 1933)「ハンマカ」(Rebecca, 1938)「寄世氏」(The Parasites, 1949)「マイチナル」(My Cousin Rachel, 1951)「義性」(A Sca-^{義性} Pegoat, 1957) の七篇は本格小説の部類には入る。「ジャマイカ・イン」(Jamaica Inn, 1936)「飢える王」

ral, 1946)などは、どちらかというと娯楽的要素のつよい作品である。「ジェラルド」(Gerald: A Portrait, 1934)は彼女の父ジェラルドの生涯を書いたものであり、「デュ・モオリア家」(The Du Mauriers, 1937)は三代にわたるデュ・モオリア家の歴史を書いたもので、「二つとも正面きつた伝記である」(「メアリ・フィン」(Mary Anne, 1954)も伝記の部に入れていいだろう。

ところで、本格ものであると娯楽ものであるとを問わず、女史の全作品を通じて、あきらかに看取できるものとも顕著な特色の一つは、いうまでもなくスリルとサスペンスの要素であろう。そくそくと身に迫ってくるような不安と恐怖と戦慄のムードが、かならずどの作品にも色濃くながれているのである。「スリル、サスペンス、切迫感、これがデュ・モオリア女史の文学を支えている、もつとも特長的な三つの要素である」というのはアメリカの書評誌の言葉であるが、極限状態における人間の心理——不安におびえ、恐怖にさいなまれ、はりつめた神経の糸が、いまにもブツンと切れそうな、そういうぎりぎりの線まで追いつめられた人間の心理を描いて、息のつまるような切迫感をもりあげる手際は、いわば女史の表芸の一つであり、多くの読者にとっても、そこが大きな魅力になっているのだろうと思う。

「レベッカ」が、あれほど多くの読者をひきつけたというのも、その成功の一半は、全篇にただよう不気味なサスペンスのムードにあったことはいなめない。それほど美しくはないが、心の素直な薄倅の若い娘が、ふとしたことから中年の紳士と結ばれて、名家の女主人となり、クモの巣のように邸内にはりめぐらされた因習と伝統にがんじがらめになって、ことごとく不安にさいなまれながら、夫の愛情だけを信じて、息もたえだえなすがたで、一步一步、幸福を手さぐつてゆく、その傷ついた心の記録を、当の女主人公である若い女性の手記というかたちで描いたこの一人称の小説は、サスペンスのもりあげかたにおいても一際ぬきん出ているように思われる。現代アメリカの人気作家クリストファ・モーリイが、「じかに皮膚に迫ってくる、そくそくする戦慄感と、絶妙繊細な女性の愛の心理と、びんとはりつめた緊張感とによって、あらゆる読者を一晩じゅう眠らせぬ小説」とまで絶讃している所以も、そこにあるのであろう。

この表芸の魅力に眩惑されて、ともすれば看過しがちであるが、注意して読むならば、そのようなサスペンスの奥に、どの作品の場合にも、もう一つの流れが、あるときは高く、あるときは低く、しかしつねに絶えること

なく、ながれていることに読者は気がつくにちがいない。女史自身は、これを「自然への回帰」と言っている。「自然への回帰」という言葉がものしすぎるなら、「原始へのあこがれ」もしくは「原始的な単純と純粹へのあこがれ」と碎いてしまっても一向さしつかえないように思う。ともかく、処女作「愛する心」いらしい、作者はつねに人間の内部にひそむ「自然への回帰」の願望を、その作品のなかで、うたいつづけてきたのである。伝統によって、組織によって、環境によって、文明によって、あるいは美徳とよばれるものによって、いかにゆがめられ、叩きつけられようと、なお人間の心の底には、このような願望が、つねに生きており、永久に生きつづけるであろう、と作者は言っているようである。そして、このような願望と、現実の社会——組織化され制度化されて身うごきもできなくなっている文明社会との摩擦から生ずる悲劇を作品のモチーフとしているのである。

そのもっともよい例は「フランス人の入江」（邦訳題名「情炎の海」）であろう。これは、いわゆる娯楽小説の部類にぞくするメロドラマ的要素のつよい小説であるが、ストーリー・テラーとしての女史の卓抜な手腕を示したものととして、発表当時、非常に好評だった作品である。映画にもなっており、「情炎の海」という題名で日本でも公開されたと記憶している。

地位と美貌と才智にめぐまれたイギリスの貴族夫人が、虚飾にみちた貴族社会と、無意味なバカ騒ぎに終始する社交界と、そのような空気のなかで無反省に満足している無気力な夫とに反逆して、わざと場末の居酒屋で安酒をおおって正体もなく酔っぱらってみたり、夜ふけの町をあられもないすがたのまま歩きまわって警官につかまったり、はては一かけらの愛情も感じない男を相手に姦通の真似ごとをしたり、さんざんキャンダルをまき散らしたあけく、そういう自分自身に、はげしい嫌悪を感じて、へんびな海岸地方にある夫の領地へ逃避する。そして、人里はなれた田舎屋敷に一人ひっそりと住んで、波の音、風のそよぎに耳を傾けるような生活をつつけるうち、ふとしたことから、海賊船を指揮する若いフランス人の船長と知りあい、その野性にひかれて、いつしか彼を恋するようになる。この恋によって、はじめて彼女は女としてのよるこびを知り、人生にめざめる。あとは、その海賊船に乗りこんでから経験する冒険のかずかずが、例によってスリリングに描かれているわけであるが、この荒筋でも想像できるように、作者のいう「自然への回帰」の願望が、この作品では真正面から強烈にうたいあげられているのである。

「愛する心」の場合にも、おなじことがいえる。この小説は、これを処女作として世に問うた二十四歳の作者に

ふさわしく、親、子、孫、三代にわたるクーム家の血のつながりの神秘的な心理的歴史図絵をくりひろげた、なかなかの野心作であるが、ここで作者が力をこめて描いているのは、文明に馴化された慣習的な愛の血と、野性にひかれる原始的な愛の血との相剋のすがたにはかならない。この作品が、作者の意気込みにもかかわらず、それほど大きな反響を得られなかったのは、主題の追求があまりにも性急にすぎたためではないかと私は考える。

「青春はふたたび来らず」は、多感な一人の少年の手記のかたちで書かれた一人称の小説であるが、一つには後年の傑作「レベッカ」の原型をなす作品であるという点で、また一つには、よくもわるくも作者の作品態度が明白に示されているという点で、女史の文学を愛好するものにとっては、注目に値する作品であらうと思う。少年期から青年期に移る年ごろの、汚れを知らぬ、傷つきやすい若い精神が、自分で自分の傷口をかきむしるような、一見無意味とも思える反抗をくりかえしつつ、ついに自己を発見して一つの安定に達するまでの、その魂の遍歴を主題にしているのであるが、「自然への回帰」の願望は、ここでは権威と因習とにたいする反逆というかたちをとってあらわれている。

荒筋を書いてみよう。

——父は世界的に高名な第一流の詩人であり、母は、その父の蔭にひっそりと息をひそめて生きているような存在である。その一人息子として生れた少年にとって、この父は世のつねの父ではない。手をひいて散歩につれて行ってくれる父でもなく、庭でボールを投げて一緒に遊んでくれる父でもない。のぞき見することすら許されぬほど高いところに住んでいる父の眼には、子の存在など、ほとんど映っていないかのようなのである。子がいたずらをしても叱りもしないし、食卓で顔を合せても笑顔も見せてくれない。笑顔どころか、言葉ひとつかけてくれず、まともに顔を見ることさえしてくれないようだ。この父の巨大な影が、たえず少年の上におおいかぶさっている。父の偉大さと輝かしさとに圧倒され、劣等感のために自信をうしなつて、父の子であるというただそのことのために少年は息がつまりそうになる。なんとかして父の影をはねのけようと、思いつくかぎりのことを必死になつてこころみてみるのだが、しかし父の不動の圧力は微動だにしない。ついに少年は、読むにたえないような汚らしいワイセツな詩をつくつて父の机の上に投げつけ、そのまま父の家を出てしまう。少年の自虐的な放浪の生活がはじまる。自己をいためつけることが、わずかに生きる支えになっている。冒険をもとめて船員になり、陶酔をもとめて女をあさる。あるいは熱にうかされたように小説を書き、狂気じみた情熱をぶちまけて戯曲

の筆をとる。あっちへぶつかり、こっちへぶつかり、全身傷だらけになって、そのいずれもが真実でないとさつたとき、はじめて彼は自分が父の影にむかってむなしい格闘をつづけていたのだと気がつく。

いうまでもなく、父は權威と因習の象徴であり、これにむかって血みどろの反抗をくりかえす少年の心の奥にあつて絶えず彼を駆り立てているのは、原始的な單純と純粹へのあこがれにほかならない。そしてこの作品は、すべての点で、そのまま「レベッカ」に通じているのである。いずれも手記のかたちで書かれた一人称の小説であり、ただ「レベッカ」では、その手記の書き手である主人公が若い女性に變つてゐる。少年にとつての父の存在は、「レベッカ」においては、先夫人レベッカがつくりあげたマンダレイ城の生活様式そのものである。壁や敷物の配色から家具の配置、朝おきてから夜ねるまでの生活の順序、召使たちの口のききかたから一つ一つの料理にいたるまで、そこには死んだレベッカの息吹きが、まだなまなましく残つてゐる。いまだにレベッカの亡霊が、この屋敷を隅々まで支配してゐるのである。

少年が父の影に押しひしがれて息もつげなかつたように、「レベッカ」のヒロインもまたレベッカによつて確立されたマンダレイ城の權威と秩序に圧迫されて、あがきようもない不安と焦燥に心をさいなまれる。少年が自己を自然の一部であると自覺することによつて心の安定をつかむのにたいし、「レベッカ」においては、虚飾と伝統の象徴であるマンダレイ城を焼失せしめ、ヒロインが生涯をかけて愛しているマキシムから一切の肩書や地位をはぎとり、そうして、すべての束縛から解放された二人の素朴な愛情のなかに悲劇の終末を暗示してゐるのである。すなわち、この作品でも、作者はやはり、非常に洗練されたかたちにおいてではあるが、原始的な單純と純粹へのあこがれをうたいつづけてゐるのだ。

この原始的な單純と純粹へのあこがれということとは、そのまま作者の対人生態度につながつてゐるように思われる。作者がロンドンの社交生活をきらつて、夫君と別居してまでコンウォールの片田舎に独居生活をつづけているということが、このことと無縁であるとは思えないのである。

ダフネ・デュー・モリア主要作品表

- The Loving Spirit (1931)
- I'll Never Be Young Again (1932)
- The Progress of Julius (1933)
- Gerald : A Portrait (1934)
- Jamaica Inn (1936)
- The Du Mauriers (1937)
- Rebecca (1938)
- The Frenchman's Creek (1942)
- Hungry Hill (1943)
- The Years Between (Play) (1945)
- The King's General (1946)
- The Parasites (1949)
- My Cousin Rachel (1951)
- Mary Anne (1954)
- A Scapegoat (1957)

目次

第一章	三
第二章	六
第三章	三
第四章	三
第五章	四
第六章	五
第七章	六
第八章	七
第九章	八
第十章	九
第十一章	一〇
第十二章	一一
第十三章	一二

第十四章	一九〇
第十五章	一九一
第十六章	一九九
第十七章	二〇六
第十八章	二一三
第十九章	二六〇
第二十章	二九八
第二十一章	三二五
第二十二章	三三〇
第二十三章	三四一
第二十四章	三五九
第二十五章	三七五
第二十六章	三八三
第二十七章	三九五

レ

べ

ッ

カ

Title : REBECCA

Author : Daphne du Maurier

Originally Copyrighted by Curtis Brown Ltd.

Copyrighted in Japan by SHINCHOSHA Co.

第一章

昨夜、わたしはまたマンダレイへ行った夢をみた。車道につづいている鉄門の傍に、わたしは立っていたらしい。しかし道がふさがっているの、しばらくのあいだ、中にはいることができなかった。門には錠がおりていて、鍵がかかっていた。わたしは夢の中で、門番を呼んだ。しかし何の返事もなかった。錆びついた門のあいだから中をのぞいて見ると、番人小屋には誰の姿も見えなかった。

煙突からは、一条の煙も上らず、小さな格子窓が、しょんぼりと口を開けていた。やがて、誰でも夢の中で経験するように、不意に、わたしの身体には超人的な力が加わった。わたしは、まるで精霊のように、目の前にある障碍物を乗り越えた。車道は、いつもとおなじに、まがりくねってつづいていたが、だんだん進んで行くにつれて、以前とは変っていることに気がついた。それは、わたしたちの知っている車道とはちがって、せまく、荒れ果てていた。わたしは、はじめ変な気がして、何が何やら、すこしもわからなかった。しかし、一本の樹の揺れている低い枝をさけようとして頭をさげたとき、やっと事情がのみこめた。自然が、ふたたび力をもちかえしてきたのである。そして、す

こしずつ、こっそりと、陰険に、そのねばりつよい長い指で、車道を侵略してしまつたのだ。あの頃でさえ、いつも空怖ろしい気持をあたえていた叢林が、いまや完全に最後の勝利をしめ、車道の両側に、暗くごちゃごちゃと茂り合っていた。白い脚をむき出しにした榊は、たがいに寄りあい、もつれあい、枝と枝を奇妙なふうにかみ合せて、まるで教会の拱廊のような円天井を、わたしの頭上につくっていた。そのほかにも、さだかではないが、たくさん樹が茂っていた。ずんぐりとした榎や、ねじくれた榆などが、桐とびったりくつついて生い茂りながら、わたしの記憶にも全然ないような巨大な灌木や草と共に、静かな大地から、よきによきと頭をもたげていた。

砂利の敷きつめてあつた車道は、いまや一面に草や苔でおおわれて、まるで一本のリボンとしか見えず、以前の面影は、ほとんど失われていた。樹々が低い枝をはりのぼして行手をはばみ、骸骨のように見える節くれ立った根が、とぐろをまいていた。しかし、そうした鬱然たる叢林のあいだにも、むかし地界標として植えられた灌木や、手入れが行きとどいて美しかった木々や、青い花冠ですぐにそれとわかる紫陽花などを、わたしは、あちこちに見ることができた。紫陽花は、何も成長をさへざるものなのをよいことにして、いつしかふたたび野生にかえり、ものすごいほど背丈が高くなって、一本の花さえつけず、傍に生えている名も知れぬ寄生植物と同じように、黒く醜い姿をさらしていた。

むかし、わたしたちの車道であったこの一条のリボンは、東にまがり西にねじれつつづいていた。ときどきわたしは道を見うしなした。しかし、いつしかまたそれは、倒れた樹の下や、冬の雨でできた泥だらけの溝の向う側などにあらわれるのであった。あの車道が、こんなに長いとは思っていなかった。樹木が生長したように、道もまた、ぐんぐんのびてしまったのであろうか。そして、この小径は、ことによると、あの邸宅ではなくて、どこかの迷宮へ——荒涼たる曠野にでも、通じているのかもしれない。だが、やがて、とつぜんわたしは邸の前に出た。八方に枝をひろげて、異様に生い茂った一本の大きな灌木が、頭上におおいかぶさっていた。胸をときどきさせ、涙で眼の奥が妙にチリチリするのを感じながら、わたしは、その場に立ちすくんだ。

マンダレイが——わたしのマンダレイが、いつものとおりに、ひっそりと、人眼をはばかるようにして、そこに立っていた。灰色の石は、夢の中の月光にかがやき、堅粋のついた窓々が、緑の芝生と露台とを映していた。建物と建物との完全な均斉も、屋敷そのものも、掌にのせた宝石のように、時は、すこしも破壊していなかった。

露台は芝生のはうに傾斜し、芝生は海へとつづいていた。ふり向くと、さながら風や嵐に乱されることのない湖水のように月光に輝く銀色の静かな水面が見えた。どんな浪も、この夢の海面をうねらせはしないであらう。また、どんな雲の群も、西風に吹き送られて、この澄んだ青白い空

を曇らせるようなことはしないであらう。わたしは、ふたたび屋敷をながめた。屋敷は、まるでわたしたちが昨日までそこに住んでいたかのように、傷一つ受けず、もとのままの姿で立っていたが、見ると庭園は、やはり林と同じく、叢林のおきてにしがたがっていた。石楠が、羊歯を幾重にもからみつかせながら五十呎も伸び、無数の名も知れぬ灌木と野合して生れた、いじけた私生児どもが、自分たちのまともでない生れをよく心得てそうしているかのように、その根もとにまつわりついていた。

ライラックは、銅色の栂と連れ添っていたが、いつでも美への敵である意地悪の常春藤は、この一對をも、びったり結びつけようとして、巻鬚をこの一對にからんで、しっかりとしばりつけていた。この見すてられた庭園の中で、いちばん幅をきかせているのは常春藤で、長い股を芝生の上にふん張り、いまにも屋敷にせまる勢いを見せていた。このほかに、もう一種類の植物があった。それは、もともと森から渡ってきたもので、ずっと以前に、樹々の根もとに種子を撒き散らして行き、そのまま忘れられていたのだが、いまや常春藤と一緒に進軍を開始し、巨大な大黃のような醜い姿で、かつては水仙の咲き匂っていたやわらかな草地のほうへ、不遠慮に突進していた。

その軍団の先鋒である蕁麻が、いたるところに生えていた。そして露台をいちめんに塗りつぶし、小径のまわりに蔓り、屋敷の窓々にさえ、そのみっともない、ひよる長い姿をなびかせていた。しかし、いうなら、それらは、しご